

東洋学報 第一〇三卷第一号 二〇二一年六月

論説

世本釈難——『易』・『詩』・『書』正義にみえる『世本』世系記載の一考察——

李 弘 喆

はじめに

『世本』は中国先秦史研究においては不可欠ともいえる重要な材料の一つである。『世本』原書はつとに散佚し、十八世紀以降の清朝考証学者が伝世文献に引用された『世本』の佚文を丹念に集め、可能な限り復元を試みた。その作業を輯佚といい、現在利用されている『世本』は清代の輯佚本である。⁽¹⁾

『世本』の成書年代及び作者に対する伝統的な関心はそのまま現代中国の研究者に継承されている。⁽²⁾従来の『世本』研究が成書年代ないし作者に関心を限定し、『世本』の文献的性格に言及しても十分な説得力をもたなかったのは、「輯本」というものの性格を十分に意識した上での包括的研究が志向されなかったからである。⁽³⁾

日本においては、『世本』の内容が主に系譜であるという認識が先秦史研究者の間に共有されてきた。最初の専論

は藤田勝久の「史記戦国系譜と世本」である。藤田の研究の主な対象は『史記』戦国系譜であり、『世本』に何が書かれているか」という視点から分析を行い、そのまま荊泮林の輯本に従っている⁽⁴⁾。

吉本道雅は『世本』を完成形態とするようなかたちに編纂される一つの契機が春秋学の発生にあったことは疑いないと指摘した⁽⁵⁾。この見解は系譜資料の成立に関する重要な指摘であり、『世本』を対象とする学術史的研究の方向が示唆されている。『世本』が如何なる史料であるのかを考察する上で、春秋学との関係という学術史的背景を考慮に入れることはやはり不可欠な手続きであると言え、これによって従来の文献学的研究が注意を向けてこなかった、春秋経伝の注疏における『世本』受容の実態に対する蓋然性のより高い推論が可能になるであろう。

山田崇仁はコンピュータプログラムを利用し、「n-gram」統計解析法で『史記』三家注及び五経正義における『世本』引用部分と、『国語』韋昭注引系譜史料の言語学的構造を分析した⁽⁶⁾。山田は「五経正義が特定人物の系譜を記す場合、『世本』の系譜関連の文章を、出来るだけそのまま引用しようとした形蹟が伺え」、「正義は系譜そのものを記す事に重点があつた事を示している」と指摘する。さらに、定量的統計に基づき、現存の『世本』世系関係記載が三つのかたち、即ち、

I 「A 生 B」、II 「A 甲生 (子) B 乙乙生 (子) C 丙」、III 「A (是) B (之) 統柄」

に分かれると指摘した。山田が指摘したように、五経正義に用いられる『世本』の世系記載は確かに主に三種類の形式に分かれるようにみえる。しかし、その三種類の世系記載が実際にはどのように分布しているのか、さらに各正義のそれぞれにおいていかなる傾向がみえるのかに配慮しなければ、引用の時代的ないし学術史的意義を見落し

てしまふ恐れがある。

『世本』は伝世していた数百年の間に様々な性格の異なる文献に引用された。残された佚文のほとんどは訓詁材料として後漢以降の注疏文に保存されたもので、その本質は訓詁学の注疏文の一部である。山田の研究は注疏文から佚文を無差別に抽出し、それに基づいて『世本』原文に含まれる記述形式の類型の「復元」を試みたものであるが、引用に伴う原文の攪乱といった事態がほとんど考慮されていない。それは、後漢以降、『世本』がいかなる書物として引用されてきたかといった『世本』受容の具体的推移の検討が等閑に付されていたからである。『世本』佚文のあり方はそれを引用した本の情報提示の形式に制約されている。果たして『世本』は引用された複数の本の中で、いかに使用されているのか、この問題を検討しない限り、佚文の記述形態に関連する議論は成立しえない。そのため、五經正義における引用を一括し、定量的に分析することには無理がある。各正義において、『世本』がいかに理解され、利用されているのか、各正義が属するそれぞれの学問を一つの対象として検討しなければならない。

こうした状況を批判的に踏まえて、筆者は『世本』の受容史、即ち引用行為自体を対象とする輯佚研究を提唱し、その方法論を構築しつつある。⁽⁸⁾これまで獲得した知見を踏まえて、本稿は『周易正義』・『毛詩正義』・『尚書正義』に保存される『世本』の世系関連の記述を対象とし、各経の学術史的背景を念頭において、正義ごとにその引用形態を検討する。まず第一章においては、五經正義に先行する旧義疏がもたらした影響を検討した上で、『周易正義』と『世本』との関係を明らかにする。そして、第二章は『毛詩正義』、第三章は『尚書正義』における『世本』の具体的な引用状況を考察し、疏文に用いられる佚文のあり方を分析した上で、世系記載の「記述形式」の本質を再考

する。この一連の作業によって、『詩』・『書』・『易』正義における『世本』受容の実態に迫りつつ、『世本』の世系関連佚文の史料学的検討を進めていく。⁽⁹⁾

一、『周易正義』からみた先行義疏の影響

後漢末期に至るまで、『世本』の世系記載の引用が全く確認できず、『世本』への関心は著しく上古の聖人・聖王制作の記述に傾き、その背後には識緯思想の動きが看取される。⁽¹⁰⁾一方、世系記載の本格的な引用は五経正義に初めて確認される。

五経正義の場合は各経がそれを対象とする学問として、それぞれの伝授過程を持ち、諸正義は初唐の孔穎達の段階で創作されたものである以上に、それ以前の注疏を流用・編綴したものである。例えば、『礼記正義』・『左伝正義』に先行する『礼記』鄭玄注・『左伝』杜預注は既に『世本』を引用しており、重層的な受容構造が確認される。さらにいうと、『礼記正義』・『左伝正義』の場合は、礼学・春秋学の学問の系統から切り離して、単独で考察することができない。故にそれぞれを「三礼」・「三伝」⁽¹¹⁾の枠組みにおいて検討することが要求される。一方、『周易正義』・『毛詩正義』・『尚書正義』の場合は礼学・春秋学と異なり、各自の学問の系統内においては、『周易』・『毛詩』・『尚書』以外の経書もしくは経書に準ずる書物が存在しない。従って、本稿は『周易正義』・『毛詩正義』・『尚書』を対象として考察を進め、「三礼疏」・「三伝疏」は別稿で検討する。

さて、まず『周易正義』からみてみよう。他の四つの正義と異なり、『周易正義』には『世本』の引用の例はな

い。孔穎達が『周易正義』だけに『世本』を使わなかったのは、単なる偶然ではない。『周易正義』に先行する『周易』の注釈といえただちに陸徳明の『經典釈文』⁽¹³⁾が引用している『周易音義』が想起されるであろう。『周易音義』は次のように宋忠注本『世本』を引用している。

世本云、化益作井。宋衷云、化益伯益也。堯臣。(周易下経夬伝)

世本云、祝融爲市。宋衷云、顓頊臣也。(周易繫辭下)

「宋衷」と表示されるのは隋に仕えた陸徳明が隋文帝の父、楊忠の「忠」を避諱したものと考えられている。現存のテキストから判断する限り、五経正義と「釈文」が用いた経のテキストの違いは明らかであり、孔穎達は「釈文」を参照しなかったと一般的に認識されている。⁽¹⁴⁾『周易正義』が「世本」を引用しない理由は孔穎達が選んだ『周易』王弼注にある。ここで、まずは五経正義に先行する義疏について少し述べておきたい。

以前、筆者が『世本』宋忠注を検討した際、唐代初期に書かれた序文・案文を除けば、五経正義の疏文に引用された宋忠の言説は主に『世本』原文と繋がっており、全て「宋仲子」と表示されていることを指摘した。⁽¹⁵⁾宋忠を「宋仲子」と記す事例は『三国志』や『華陽国志』、また呉の陸績の「述玄」⁽¹⁶⁾にもみえており、呼称としては比較的古いため、五経正義の編纂段階において、孔穎達らの手元に比較的古い抄本があったと推測される。あらためて五経正義にみえる宋忠を「宋仲子」と表示する引用例をみると表一のようになる。ここに示されるように、宋忠を「宋仲子」と表示する引用例は『尚書正義』・『毛詩正義』・『左伝正義』に合計八件みえ、『世本』の「作」と「居」に限定されている。詳しくみれば分かるように、2と3、6と8は明らかに重複しており、同じものが引かれているこ

表一、宋忠を「宋仲子」と表示する引用・言及例一覧

引用・言及例	記述 分類	出 処
1. 世家 [*] 云、蔡叔居上蔡。宋仲子云、胡徙居新蔡。	居	『尚書正義』 蔡仲之命
2. 世本云、杼作甲。宋仲子云、少康子杼也。	作	『尚書正義』 費誓
3. 世本云、杼作甲。宋仲子云、少康子名杼也。	作	『毛詩正義』 叔于田
4. 世本云、垂作鉞。宋仲子注云、鉞刈也。	作	『毛詩正義』 臣工
5. 世本云、黃帝作冕。宋仲子云、冕冠之有旒者。	作	『左伝正義』 桓公二年
6. 世本云、楚鬻熊居丹陽、武王徙郢。宋仲子云、丹陽在南郡枝江縣。	居	『左伝正義』 桓公二年
7. 世本云、邾顏居邾、肥徒郕。宋仲子注云、邾顏別封小子肥於郕、爲小邾子。	居	『左伝正義』 莊公五年
8. 宋仲子云、丹陽南郡按江縣也。	居	『左伝正義』 僖公四年

*『史記集解』管蔡世家「世本曰、居上蔡」。校勘記「盧文昭云、世家當作世本、据史記集解」。なお、『史記』について、本稿は中華書局本（一九五九年初版）に従う。

となる。

この一群の引用例は陸徳明の『周易音義』にみえるものと同様に「原文＋宋注」のかたちである。では、何故このような引用例が『周易正義』・『礼記正義』にみえないのか。その手掛かりは孔穎達の序文にある。まず、孔穎達は『毛詩正義』の序文において、劉炫の義疏を「特に殊絶」と称賛し、故にそれを「もと」とすると述べている。⁽¹⁷⁾次に、『尚書正義』の序文においては、劉焯・劉炫の義疏は旧義疏の中で最も「詳雅」と評価するが、劉炫の義疏もなお完璧なものではないと指摘している。⁽¹⁸⁾ここでは『毛詩正義』の序文のように、劉炫の義疏を「もと」とするとは示していないが、「必ず旧聞に拠る」という正義編纂の立場を明言しているので、劉炫の義疏は最も重

要な参考資料になったに違いない。最後に、『左伝正義』の序文においては、劉炫を晋宋以来の義疏家の「翹楚」と讃えている。ここでは劉炫の杜預注に対する攻撃的態度を強く非難するが、劉炫の義疏はやはり他の義疏より優れていると認めた上で、それを「もと」とすると述べている。⁽¹⁹⁾

このように各序文において、先行する義疏の優劣が説明されており、『毛詩正義』・『尚書正義』・『左伝正義』が劉炫の義疏を藍本にしていることは明らかである。一方、『周易正義』の序文には「先以輔嗣爲本」、⁽²⁰⁾『礼記正義』の序文には「仍據皇氏以爲本」とみえ、『周易正義』は王弼注、『礼記正義』は皇侃疏を藍本にしていることが分かる。

古勝隆一は、注を伴わない経書が『隋書』経籍志に著録されておらず、漢魏時代の注の形態に着目すれば、経が独立した著作として通行することはなかったと指摘している。⁽²¹⁾後漢魏晋の經典は「単経本」ではなく、主に経注一体の注本のかたちで伝わっていたと考えられる。その後、義疏学が隆盛になり、多様な義疏が作られた。実際に五経正義の序文をみれば、孔穎達を選んだ藍本はもちろん「単経本」ではなく、初唐までの学問の流れによって、それぞれ違う時代の注本・疏本を「もと」としたことがわかる。喬秀岩が指摘するように、孔穎達は「疏は注を破らず」という立場を厳守し、藍本の注文に忠実に従い、注文に合わない先行義疏を徹底的に批判した。⁽²²⁾このような背景に鑑みれば、『周易正義』が『世本』を引いていない原因は藍本とされている王弼注にあると考えられる。『周易』王弼注が『世本』を注釈材料として採用していないので、王弼注を踏襲した『周易正義』はその態度を受け継ぎ、『世本』に目を向けなかったのである。

一方、『尚書正義』・『毛詩正義』・『左伝正義』にみえる「原文＋宋注」のかたちの記述は『釈文』所引『周易音

『義』と共通の時代的特徴を有し、さらに孔穎達の序文が提示している情報と合わせて考えれば、隋の劉炫の義疏に由来するものと推測できる。実際に『左伝正義』には『世本』を引用する劉炫の疏文が確認される。⁽²³⁾

ここに至って、五経正義における『世本』の引用状況は完全に旧注疏に左右されているようにみえる。南北朝時代の義疏はほとんど亡びてしまい、五経正義から旧疏を剝離することは困難である。五経正義全体について、一部の研究者の間には旧疏を過大評価し、初唐の編纂作業を軽視する傾向も見受けられる。⁽²⁴⁾『周易正義』の場合は『周易』王弼注が早い段階で広く受容され、初唐に至っても全く衰えていない。王弼注が孔穎達らに選ばれたことによって、その後の義疏からの直接的影響は排除された。従って、各正義における『世本』の引用状況に関しては、五経正義が成立する以前の各経にまつわる学問の蓄積・発展を無視するわけにはいかない。ここでは宋忠を「宋仲子」と表示している引用例を旧疏の痕跡として示し、旧疏の影響を明らかにした。これを踏まえて、『毛詩正義』の考察に移ろう。

二、『毛詩正義』疏文にみえる佚文のあり方

まずは『毛詩正義』に現れる順番に従い、引用例を整理した。佚文は、輯本においては内容によって、それぞれ異なる篇に属している。⁽²⁵⁾

表二に示されるように、『毛詩正義』における『世本』の引用は上古関係の記述に集中していることが明らかであり、『世本』の引用・言及が合計十三件ある。

表二、『毛詩正義』にみえる『世本』一覽

引用・言及例		記述分類		出處	形態
1.	世本云、杼作甲。宋仲子云、少康子名杼也。	作		叔于田	引用
2.	案世本、會人卽檜之祖也。	帝王世本		檜譜	言及
3.	世本云、懿王徙於犬丘。	居		小大雅譜	引用
4.	世本云、暴辛公作墳。蘇成公作簋。	作		何人斯	引用
5.	以堯與契俱爲嚳子。家語・世本其文亦然。	帝王世本		生民	言及
6.	又世本云、帝嚳卜其四妃之子、皆有天下。	帝王世本		生民	引用
7.	世本云、有郃氏女曰姜嫄。	帝王世本		生民	引用
8.	計虞夏之時、世代尙質、名字之別、難得而知。世本史記不應皆沒其名、而盡書其字、以之爲名、未必非矣。	帝王世本		公劉	言及
9.	世本及周本紀皆云、成王生康王、康王生昭王、昭王生穆王、穆王生恭王、恭王生懿王及孝王、孝王生夷王、夷王生厲王。	帝王世本		民勞	引用
10.	(經云、王命召虎、是名虎也。)於世本、穆公是康公之十六世孫。	諸侯世本		江漢	言及
11.	世本云、垂作鈔。宋仲子注云、鈔刈也。	作		臣工	引用
12.	正義曰、行父是季友之孫。故以季孫爲氏。死諡曰文子。左傳世本皆有其事。	卿大夫世本		駟	言及
13.	世本云、宋湣公生弗甫何。弗甫何生宋父。宋父生正考甫。正考甫生孔父嘉、爲宋司馬。華督殺之、而絕其世。其子木金父降爲士。木金父生祁父。祁父生防叔、爲華氏所偁奔魯、爲防大夫。故曰防叔。防叔生伯夏。伯夏生叔梁紇。叔梁紇生仲尼。	卿大夫世本		那	引用

*周の先王の公劉の名字に関連する議論である。

まず、1・4・11の記述は「作」、3は「居」であり、いずれも世系記載ではないので、今回の考察対象から外す。

2の「即」をみれば、その記述が『世本』の引用ではなく、『世本』から採取した情報を提示したものであることは明らかであり、即ち疏文の説明であることがわかる。

5は疏文「以堯與契俱爲嚳子」について『孔子家語』・⁽²⁶⁾『世本』にも同様の記述があり、その根拠となっていることを示している。疏文の全体をみれば、5がその直前の『大戴礼』帝繫篇からの引用文を要約したものであることは明らかである。⁽²⁷⁾そうであれば、この記述によって『世本』に疏文と同等の内容が存在したことは示唆されているが、『世本』原文を直接に引用したものとは言えない。

6・7は引用のかたちにはなっており、どちらも輯本の帝王世本篇に分類されている。しかし、それぞれの内容をみれば、引用されているのは世系記載そのものではなく、世系記載に附されている説明文である。下にみる13が示しているように、『世本』の世系記載には世系情報の間に登場人物についての説明文も混在している。実はこのような事例は『尚書正義』にもあるので、以下であらためて説明を加える。

8は西周の先王に関連する疏文の一部であり、『世本』の内容に直接には触れず、『史記』と併せて言及されているものである。その次の9は成王から厲王に至るまでの西周王室世系である。周知の通り、完全な西周王室世系を持つ最古の伝世文献は『史記』である。客観的にいえば、ここで『世本』と『史記』周本紀が並用されている理由は他に周本紀を傍証しうる材料がなかったためである。疏文においては、『漢書』に由来する『史記』と『世本』と

の関連性を踏まえた上で、両者を並用しているに違いない。今日の我々もそれをみれば直ちに『史記』が『世本』の世系記載を参照していると想像がつくだろう。

しかし、9が記している世系情報は確かに周本紀に矛盾してはいないが、周本紀を正確に引用してはならず、その情報を集約して提示しているようにみえる。『世本』に収録される西周王室世系は周本紀に矛盾しないと推測できるが、ここでは周本紀の記述のみが集約されており、『世本』が一字一句正しく引用されていると考えることはできない。故に9を根拠として、「A生B」の形式を『世本』の世系記載の基本的記述形式と断言することはできない。10について、「『世本』において」と書かれてはいるが、「穆公是康公之十六世孫」という表現は穆公から康公までの詳細な世系関係を省略して、必要とされる情報だけを示していると考えられる。故に『世本』原文をそのまま引用したものではない。

12は季文子について説明する疏文の一部である。春秋時代に関連するものはこれが初見となる。しかし疏文は、『左伝』・『世本』には季文子のことがかかれていいるということしか示しておらず、原文の状況が判断できない。

13は宋湣公から孔子（仲尼）に至るまでの孔子世系であり、合わせて十一世代となる。『左伝正義』昭公七年は『家語』本姓篇の孔子世系を修正した上で引用し、

家語本姓篇云、宋湣公熙生弗父何、何生宋父周、周生世子勝、勝生正考父、考父生孔父嘉、其後以孔爲氏也。

孔父生木金父、金父生皐夷父、夷父生防叔。防叔辟華氏之偏、而奔魯生伯夏、伯夏卽生梁紇、梁紇卽生孔子。とする。⁽³⁰⁾13と『左伝正義』昭公七年に引かれる『家語』の孔子世系とを比較すれば、「世子勝」の一代が欠落してい

ることがわかる。ではなぜ『左伝正義』は『毛詩正義』と違って、『世本』ではなく、わざわざ本姓解を修正した上で引用しているのか。

まず、『毛詩正義』が『世本』の孔子世系を引用した上で、正考甫を孔子七世の祖と説明したのは決して誤りではない。故に正考甫より前の世代が欠落していても、一応『毛詩正義』の中では矛盾は生じない。そして、『左伝正義』の編纂に当たって、『世本』の孔子世系の世代数が杜預注に矛盾することに気づき、欠落のある『世本』の孔子世系を退け、杜預注に矛盾しない『家語』孔子世系を改めた上で、採用したと考えられる。⁽³¹⁾ 前章で既に触れたように、初唐の経学者は「疏は注を破らず」という立場を厳守し、五経正義は各経における疏文と注文との整合性を何よりも重視している。右の『世本』の孔子世系の取捨選択はまさにその理念を反映する一例である。

『毛詩正義』における『世本』世系記載の引用はいうまでもなく、経文・注文を説明するものであり、『詩経』が具体的な人物に言及することが少ないので、世系に対する説明も少ないのである。『世本』の世系記載には叙事的な記述が混在しており、故に疏文は説明の便宜上、必要な世系情報を集約した上で提示していると考えられる。

13の孔子世系に示されるように『世本』の世系記載は元々純粋な系譜ではないと考えられる。実際に後漢時代の王符の『潜夫論』志氏姓に保存される孔子世系は、13との間には字の出入や表現の違いはあるが、文章の構造は酷似し、世系記載の間に挿入される説明文も結果的に同じ事件を指すものである。⁽³²⁾ 志氏姓の孔子世系が『世本』を参照しているのであり、世系情報の間に散見する説明文は少なくとも宋忠注が成立する段階で既に原文にあったと考えられる。⁽³³⁾ 13の孔子世系は『世本』の世系記載の不規則性を示しており、9の西周王室世系の「A生B」の形式も

『世本』及び『史記』周本紀の世系記載の情報を集約したものに過ぎない。

疏文の記述は『毛詩』本文の内容に従うため、『毛詩正義』に言及された『世本』の記載も上古・三代に関するものに集中している。『毛詩』には歴史上の人物への具体的な言及が少ないため、『毛詩正義』における世系についての説明も少なく、従って『世本』世系記載の用例も少ない。引用される『世本』は、疏文の都合によって節略されているのである。果たして、これらの現象は『毛詩正義』にしかみえないものであろうか。引き続き、『尚書正義』を検討してみよう。

三、『尚書正義』に用いられる世系記載の「形式」

『尚書正義』を前章の表二と同じ方法で整理した。表三に示されるように、『毛詩正義』と同じく、『尚書正義』も主に『世本』の上古関係の記述を採用している。『世本』の引用・言及は合計二十三件あり、そのうちに世系関係のものは十三件ある。

まず、1・2・8・20・23の五件は「作」、12・21の二件は「居」に関連するものであるため、今回の考察の対象外となる。また、氏姓に関連するものは10・18・22の三件あるが、そのうちの疏文の10・22は内容から氏姓に関連すると判断されるものであり、引用のかたちをとっていないので、原文の状況は不明である。

3・4は引用ではなく、『世本』は疏文に挙げられる複数の書物の一つとして言及されている。その尚書序の疏文は、『帝繫』・『大戴礼』・『五帝徳』・『家語』・『史記』にみえる五帝に関わる説は皆『世本』に由来する⁽³⁵⁾と説明する。

表三、『尚書正義』にみえる『世本』一覽

引用・言及例		記述分類	出処	形態
1. 又蒼頡造書出於世本、蒼頡豈伏犧時乎。		作	尚書序	言及
2. 世本云、蒼頡作書。司馬遷・班固・韋誕・宋忠・傅玄皆云、蒼頡黃帝之史官也。		作	尚書序	言及
3. 案今世本・帝繫及大戴禮五帝德并家語宰我問・太史公五帝本紀、皆以黃帝爲五帝。		帝王世本	尚書序	言及
4. 又帝繫・本紀・家語・五帝德皆云、少昊卽黃帝子青陽是也、顓頊黃帝孫、昌意子、帝嚳高辛氏爲黃帝曾孫、玄囂孫、僑極子、堯爲帝嚳子、舜爲顓頊七世孫。此等之書說五帝而以黃帝爲首者、原由世本。		帝王世本	尚書序	言及
5. 若然、湯名履、而王侯世本湯名天乙者、安國意蓋以湯受命之王、依殷法以乙日生、名天乙。至將爲王、又改名爲履、故二名也。亦可安國不信世本、無天乙之名。		帝王世本	堯典	言及
6. 案世本、堯是黃帝玄孫、舜是黃帝八代之孫。		帝王世本	堯典	言及
7. 帝繫及世本皆云、黃帝生玄囂、玄囂生僑極、僑極生帝嚳、帝嚳生堯。		帝王世本	舜典	言及
8. 世本云、容成作歷、大撓作甲子、二人皆黃帝之臣。		作	舜典	言及
9. 啓禹子、世本文也。		帝王世本	益稷	言及
10. 孔・馬・鄭・王・與皇甫謐等皆言、有扈與夏同姓、並依世本之文。		氏姓	甘誓	言及
11. 世本云、帝堯爲陶唐氏。		帝王世本	五子之歌	言及
12. 世本云、昭明居砥石。		居	胤征	言及
13. 世本・本紀皆云、契是帝嚳子。		帝王世本	胤征	言及
14. 太甲、太丁子。世本文也。		帝王世本	伊訓	言及
15. 世本・本紀皆云、太甲崩、子沃丁立。		帝王世本	咸有一德	言及
16. 此及下傳言仲丁是太戊之子、河亶甲、仲丁弟也。祖乙、河亶甲子。皆世本文也。		帝王世本	咸有一德	言及
17. 世本云、盤庚崩、弟小辛立。崩、弟小乙立。崩、子武丁立。		帝王世本	說命上	言及
18. 世本云、芮伯姬姓。		氏姓	旅獒	言及

19. 案世本云、后稷生不窋、爲昭。不窋生鞠陶、爲穆。鞠陶生公劉、爲昭。公劉生慶節、爲穆。慶節生皇僕、爲昭。皇僕生羌弗、爲穆。羌弗生毀榆、爲昭。毀榆生公飛、爲穆。公飛生高圉、爲昭。高圉生亞圉、爲穆。亞圉生組紺、爲昭。組紺生大王亶父、爲穆。亶父生季歷、爲昭。季歷生文王、爲穆。	帝王世本	酒誥	引用
20. 世本云、儀狄造酒、夏禹之臣。又云、杜康造酒。	作	酒誥	引用
21. 世家 ⁷ 云、蔡叔居上蔡。宋仲子云、胡徙居新蔡。	居	蔡仲之命	引用
22. 王肅云、彤、姒姓之國。其餘五國、姬姓。畢・毛、文王庶子。衛侯、康叔所封、武王母弟。依世本・史記爲說也。	氏姓	顧命	言及
23. 世本云、杼作甲。宋仲子云、少康子杼也。	作	費誓	引用

- * 1 『史記』周本紀は「鞠」に作る。
- * 2 『史記』周本紀は「差弗」に作る。校勘記「宋板・閩本同。毛本羌作差、下同」。
- * 3 『史記』周本紀は「毀隳」に作る。それに対して、『史記集解』には「世本作榆」とあり、『史記索隱』には「系本作偽榆」とある。もとづく写本の違いと考えられる。校勘記「閩本同。毛本榆従ず、下同」。
- * 4 『史記』周本紀は「公非」に作る。校勘記「閩本・明監本同。毛本飛作非、下同」。
- * 5 『史記』周本紀は「公叔祖類」に作る。それに対して『史記索隱』には「系本云、太公組紺諸整。三代世表稱叔類、凡四名。皇甫謐云、公祖一名組紺諸整、字叔類、號曰太公」がみえる。校勘記「陳浩云、組應作祖。各本俱誤」。
- * 6 『史記』周本紀は「古公亶父」に作る。
- * 7 本文註（8）参照。
- * 8 姫は妣の誤り。校勘記「案妣當作姫、形近之譌」。

つまり、『尚書正義』の疏文において、『世本』は上述の文献より先行すると認識されている。しかし、最終的に疏文は、この『世本』に由来する五帝説が誤りであると判断している。つまり、疏文は『世本』の説と異なる偽孔伝の立場に従っている。ここには、正義疏文とその「もと」になる先行学説との整合性を重視する孔穎達の姿勢が窺

える。

5の『王侯世本』はあるいは宋忠注本『世本』ではなく、『隋書』經籍志に記される「世本王侯大夫譜二卷」を指しているかもしれない。⁽³⁶⁾この「世本王侯大夫譜」は『新唐書』藝文志の「王氏注世本譜二卷」に相当すると思われるが、あるいは唐宋の間に王氏によって注釈が作られた可能性もある。しかし、その痕跡は全く残っておらず、検証しようがない。疏文の文脈をみれば、やはり『王侯世本』の説を引用した後、孔安国の説に言及している。『王侯世本』と宋忠注本『世本』との間には違いがあると考えられるが、疏文における引用の目的・手法は同じである。

6は黄帝に関連する内容である。『世本』によれば、堯は黄帝の玄孫、舜は黄帝の八代目の孫と説明している。「A是○○」の形式は訓詁的な説明と考えられ、『世本』原文の引用ではなく、情報提示に過ぎない。その直後の疏文には「世本之言未可據信」と明白に『世本』の説を否定している。

7もまた黄帝にまつわる内容であり、『世本』が『帝繫』と並用されている。そのかたちは『毛詩正義』にみえる西周王室世系と同じく「A生B」になっている。現在の『大戴礼記』⁽³⁷⁾帝繫には「黄帝産玄囂、玄囂産蟠極、蟠極産高辛、是爲帝嚳。帝嚳産放勳、是爲帝堯」とあり、両者を比較すると、7の方がやや節略しているという印象を受ける。「産」と「生」とは同訓であり、秦代には「同生」を「同産」、「畜生」を「畜産」などの書き換えが認められる。政・生の発音が近いことから、「生」を「産」に書き換えた理由は始皇への避諱と考えられるが、近年の里耶秦簡の研究で、始皇帝本人ではなく、その母親の諱を避諱した可能性も指摘されている。⁽³⁸⁾

帝繫には数多くの世系関係の記述があり、『世本』との関連性が以前から指摘されている。現存の『大戴礼記』の

成立は極めて複雑であり、疏文の「『帝繫』が『世本』を参照した」という認識に安易に従うことはできない。逆に『世本』がその原資料を参照した可能性も十分あり得る。ここで強調したいのは、『世本』との関連性を別にして、『帝繫』に頻見する「A産B」式の世系記載に鑑みれば、少なくとも「A産B」のかたちで世系を表示することが礼学の中に定着していたことが確言されることである。⁽³⁹⁾なお、注意すべきは7の直後の疏文が「況彼二書未必可信」と述べ、『世本』の説を否定していることである。

9は典型的な情報提示であり、明らかに引用ではない。禹と啓との親子関係は多くの文献にみえる。逆にいえば、それを否定するものはない。前述のように、「世本の文なり」と説明しているのは疏文が『帝繫』などの世系記載が『世本』に由来すると認識しているからである。

11は引用のかたちではあるが、厳密に言えば、それは世系関係ではなく、堯の氏を説明している。前章にも触れたようにこのような引用例が確認される以上、『世本』の世系記載は不規則なものといわざるを得ない。従って、『世本』の世系記載に特定の記述形式を想定することにはそもそも無理がある。

13は殷の開祖、契の話である。ここでは『世本』が『史記』殷本紀と並用されている。⁽⁴⁰⁾西周王室世系と同様に、殷の世系についても、殷本紀を傍証しうるものはほとんどない。故に『世本』が用いられる原因は前章で既に触れた『毛詩正義』民勞にみえる引用例と同じである。そして、実際には殷本紀には「契是帝嚳子」の記述がないので、⁽⁴¹⁾13はやはり引用ではなく、疏文の解釈的な説明と考えられる。

14は殷王室の世系に関連するものである。実は14は13と同じく、山田が提示した『世本』世系関係記載のⅢ「A

(是) B (之) 続柄」に属するものであるが、13に対する分析に基づき、さらに前章で検討した『毛詩正義』の用例も踏まえて判断すれば、この「A (是) B (之) 続柄」は『世本』の世系記載の形式というわけではなく、五経正義の疏文が情報を提示する時の一つの常套的な表現形式と考えるべきであろう。

15もまた殷王室世系であり、『世本』はここでも殷本紀と並用されている。殷本紀では「伊尹嘉之、迺作太甲訓三篇、褒帝太甲、稱太宗。太宗崩、子沃丁立」となっている。15は殷本紀の「A崩、子(弟) B立」と同じ形式ながら、さらに簡潔に説明するために「太宗」を「太甲」に改めたと考えられる。ちなみに、この「A崩、子(弟) B立」は単に続柄を示すものではなく、王位継承を示すための書法と理解すべきである。

殷王室世系に対して、盤庚上の疏文には、

本紀云、祖乙崩、子祖辛立。崩、子開甲立。崩、弟祖丁立。崩、開甲之子南庚立。崩、祖丁子陽甲立。崩、弟盤庚立。是祖乙生祖辛、祖辛生祖丁、祖丁生盤庚、故爲曾孫。

とあり、殷本紀を引用するかたちを取っている。⁽⁴²⁾疏文の「引文」は「(A)崩、子(弟) B立」という形式で書かれている。それに対する殷本紀の冒頭部分が「A崩、子(弟)立」のかたちではあるが、「沃甲崩」以降は「子(弟) B立」ではなく、「立子(弟) B」になっている。両者を比較すれば、疏文の「引文」には殷本紀原文を節略して、書式を整えている印象が見受けられる。

また、注目すべきは、疏文には「是祖乙生祖辛、祖辛生祖丁、祖丁生盤庚、故爲曾孫」とあり、先行する「A崩、子(弟) B立」のかたちの引用文を「A生B」のかたちでまとめなおしていることである。これは前の王位継承の

記録の中から世系情報のみを抜き出したものに違いない。つまり、「A生B」も『世本』関連に限らず、疏文が世系情報を提示する時の常套的な表現形式と考えられる。

16は引き続き、殷王室の統柄の説明である。殷本紀にもその統柄が説明できる記述はあるが、王位継承についていえば、仲丁と河亶甲との間には外王があるべきにもかかわらず、言及されていない⁽⁴³⁾。両方とも『世本』の文であると説明されているが、「世本の文なり」の前に「皆」の字があることからわかるように、集約的な表現であり、『世本』の原文を引用しているわけではないと考えられる。

17は盤庚から武丁に至るまでの殷王世系である。それに対応する殷本紀の世系情報⁽⁴⁴⁾は17に矛盾しないが、17は殷本紀の記述より簡潔である。ところで、ここでは、『正義』の疏文が殷本紀に言及していない。盤庚上の疏文には「史記殷本紀云、盤庚崩、弟小辛立。殷復衰。百姓思盤庚、乃作盤庚三篇。与此序違非也」がみえる。ここからは、まず疏文がやはり殷本紀の内容を節略して示していることが分かる。また、この疏文は明確に殷本紀の説を否定しているから、ここで『史記』に言及すると齟齬を生じる。疏文の中の「整合性」が配慮され、『史記』に言及しなかったものと考えられる。

19は西周の先王の昭穆を語るものである。類似『世本』の引用例は『尚書正義』に限らず、他の正義にもみられない。世系情報の間に挟まれている「爲昭」・「爲穆」はそもそも礼学に関連するものと考えられ、『礼記』には「昭穆」に関連する記述が頻見する⁽⁴⁵⁾。吉本道雅が指摘するように、王侯・世族の系譜は本来的にはそれぞれの家系において祭祀の必要上保存されていたものと考えられ、祭祀と関係するものである⁽⁴⁶⁾。しかし、後漢時代における『世本』

の受容実態を考慮すれば、やはり『世本』の世系記載に礼学の「昭穆」制の内容が入っていたとは考え難い。⁽⁴⁷⁾

また、19には周本紀の西周先王に関する記述との間に文字の異同が少なからず存在するが、世代や登場人物は矛盾しない。その文字の異同は『世本』と周本紀との違いではなく、伝写の過程で生じたものであろう。19をそのまま『世本』原文と理解することは難しい。

以上の検討を踏まえて、『尚書正義』の疏文の世系に関わる記載の特徴をまとめておきたい。『尚書正義』疏文は『世本』の世系情報を提示し、人物の続柄を説明するが、『世本』の世系記載がそのまま保存されているとは断定できない。また、引用のかたちに見える連続的な世系記載も、実際には情報が集約されてから提示されていると思われる。

『尚書正義』にみえる『世本』の世系記載の引用例は全て上古・三代に限られており、『尚書』の内容に制約されている。上古関係の引用には主に『世本』を一説として取り上げた上でそれを否定する傾向が見受けられる。他の四正義においては、この現象が見受けられない。野間文史が指摘したように、『尚書正義』は緯書に対しても否定的な立場を取っており、その主な原因は『尚書正義』の依拠した偽孔伝にあると考えられる。⁽⁴⁸⁾筆者が既に指摘したように『世本』の記述は緯書と一定の共通点を持つ。⁽⁴⁹⁾『尚書正義』の緯書及び『世本』に対する姿勢は正にその裏附になる。

『尚書正義』の『世本』に対する態度は他の四正義とは異なるものの、「疏は注を破らず」の初唐経学の立場を厳守しており、学術思想的な目線でみれば、決して他の四正義に矛盾しているわけではない。

『尚書正義』の疏文では、殷・周王室に関わる内容は主に『史記』と並用し、『史記』の世系情報はほとんど矛盾しないことがわかる。実際に『史記』殷・周本紀の注釈にも『世本』が引用されているが、世系記載はほとんどみられない。それは両者の世系情報が基本的に一致し、引用する必要がなかったためだと考えられる。前述のように、完全な殷・周王室世系は『史記』に初見する。殷・周王室について、『尚書正義』に最も有用な資料は『史記』殷・周本紀に違いない。なぜ『尚書正義』は『世本』に注目したのであるうか。五経正義においては、司馬遷が『世本』を参照したという認識が前提となっていたと考えられ、そのため、『史記』・『世本』が並用される場合は『史記』より『世本』を優先している。『世本』と『史記』との関連性は班固の『漢書』がもたらしたものであり、「漢書学」の発展と共に広く受容され、『尚書正義』が成立する段階では既に定着していたと考えられる。⁽⁵⁰⁾

おわりに

本稿では、『周易正義』・『毛詩正義』・『尚書正義』に用いられる『世本』世系記載の疏文としての役割・あり方を逐一確認した。各正義において、先行する義疏が正義にもたらした影響を念頭に置き、『世本』の受容状況の時間的変遷を意識した上で、それぞれの考察を行った。まず、『周易正義』が『世本』を引用しない原因は、王弼注の『世本』への態度を踏襲したことにあると指摘した。ついで、『毛詩正義』においては、『毛詩』に言及される歴史上の人物が少ないので、人物の世系関係への説明も少ない。『毛詩正義』にみえる『世本』世系記載の引用・言及例を分析した上で、『世本』の世系記載の不規則性を指摘し、疏文は説明の便宜上、必要な世系情報を集約した上で提示し

ていることを明らかにした。さらに、『尚書正義』に利用される『世本』の上古関係の世系情報は主に或説として否定される傾向が見える。その主な原因は『尚書正義』がその依拠した偽孔伝の立場を継承したことにあると考えられ、筆者が指摘した『世本』と緯書との間に存在する共通点を裏附ける。

『毛詩正義』・『尚書正義』に用いられる『世本』の殷・周関係の世系佚文は主に『史記』と並用され、『史記』より優先されることも見受けられる。『漢書』に由来する「司馬遷が『史記』を編纂する際に『世本』を参照した」という認識が『世本』を用いる前提となり、『世本』が広く受容された原因の一つであったことが明らかになった。

以上の所見を踏まえた上で、本稿では、『尚書正義』・『毛詩正義』のみならず、『礼記正義』・『左伝正義』にも散見される、『世本』世系記載の固有の形式とみなされる「A生B」の形式の世系佚文を中心として分析を行った。⁵¹ その結果、「A生B」の形式が世系記載の固有の形式であった根拠はなく、疏文が連続的な世系情報を提示するための形式に過ぎないことが確認された。『世本』の世系記載の記述形式を明らかにしたことによって、これまで厳密な記述形式の存在を想定した上でなされて来た「作篇」の研究をはじめ、佚文の記述形式に依拠する再輯佚の限界は自明となり、再検討を余儀なくされよう。

上述のように、本稿で獲得した知見は『世本』研究のみならず、輯本研究全体にも大きな意義を持つ。これまでの輯本に対する史料学的考察は専ら輯佚の段階に焦点をあて、輯佚の再確認や再輯佚が中心として行われた。そのために輯本に対する認識は清代の輯佚活動と同じ次元に留まっていると言わざるを得ない。輯佚によって集められたのは、原書の断片はなく、原書に対する認識である。各時代の多様な認識は輯本に収められることによって、同

じ平面上に投影され、それぞれが持つ傾向が捨象されてしまった。輯本をもとにして、原書を復元することはできないが、引用元に立ち戻れば、原書への認識及び佚文の実態を説明することは可能である。さらに言えば、原書の受容実態を説明することと輯本の史料学的考察とは表裏の関係である。

中国古代史研究においては、輯本は欠かせないものであるにもかかわらず、「輯本はいかなる原資料に依拠しているのか」という根本的な問題はいまだ検討すらされておらず、筆者の一連の研究はその問題に答えるための作業である。輯佚によって、散佚文献の部分的な情報が輯本に収録されたのであり、その史料価値は決して否定されるべきものではない。しかしながら、佚文はいかなる意識の下で選択され、残されたのか。その上で、佚文のあり方は引用元での役割によって、いかに変化しているのか。それを明らかにすることは輯本を利用する際になくてはならない手続きであろう。今後、新たに発見される散佚資料を含め、輯本は一群の未開拓の資料と言える。筆者は『世本』の研究を通じて、輯佚研究の新たな方向を示しておきたい。

なお、本稿で獲得された知見を活かし、春秋三伝注疏に用いられる『世本』佚文の実態を分析した上で、中世経学の発展に伴う『世本』受容のあり方の変貌を明らかにしたい。

参考文献

日本語

喬秀岩二〇〇一『義疏学衰亡史論』白峰社

世本釈難 李弘喆

古勝隆一 二〇〇一「釈奠礼と義疏学」小南一郎編『中国の礼制と礼学』朋友書店

野間文史一九八八「引書から見た五経正義の成り立ち——所引の緯書を通して——」『哲学』第四〇集

野間文史一九九八『五経正義の研究』研文出版

藤田勝久一九九五「史記」戦国系譜と『世本』『愛媛大学教養学部紀要』二八

山田崇仁二〇〇一「世本」と『国語』韋昭注引系譜資料について——N-gram統計解析法による分析——」『立命館

史学 二二一

吉本道雅二〇〇七「『左伝』と西周史」『中国古代史論叢』第四集

李弘喆二〇一八「世本探源——『世本』受容史研究序説——」『史林』一〇一—五

李弘喆二〇一九「世本錐指——『世本』宋思注をめぐる——」『東洋史研究』七八—三

李弘喆二〇二〇「世本志疑——『三礼』における『世本』受容をめぐる——」『史林』一〇三—五

渡邊英幸二〇一五「里耶秦簡「更名扁書」試釈——統一秦の国制変革と避諱規定——」『古代文化』六六—四

中国語

陳建良一九九六「『世本』析論」『史学史研究』一九九六年第一期

陳夢家一九五五「『世本』考略」『六国紀年』学習生活出版社

黄敏学二〇〇七「『世本』作篇見存音楽史料」『中国音楽学』二〇〇七年第四期

吉聯抗一九八〇「『世本』作篇樂事類鈔」『音楽研究』一九八〇年第四期

喬志忠二〇一〇『世本』成書年代問題考論』『史学集刊』二〇一〇年第五期

王玉德一九八六『世本』成探』『華東師範大學學報』一九八六年第一期

原昊二〇一三『世本』作者析論』『古籍整理研究學刊』二〇一三年第六期

周晶晶二〇一一『世本』研究』浙江大學博士論文

註

(1) 現存の『世本』輯本の詳細については、『世本八種』(商務印書館、一九五七) 出版説明参照。

(2) 『世本』を対象とする研究としては、陳夢家一九五五をはじめ、王玉德一九八六・陳建良一九九六・喬志忠二〇一〇・周晶晶二〇一一・原昊二〇一三などが挙げられる。先行研究の共通の問題は、輯本を『世本』原本の断片とみなして進められた点にある。個々の佚文は長期間にわたって複数の引用者が選択したものであり、原文の表現が正確に保存されているとは限らない。『世本』佚文は『世本』原文そのものではなく、その使用された後に残された痕跡に過ぎない。原本の断片として均質に扱いうるものではなく、『世本』に対する複数の引用者の認識が蓄積されたものに他ならない。他に『世本』作篇を研究対象にする研究者もい

るが、理解の方向性が射ていない。例えば、吉聯抗一九八〇・黄敏学二〇〇七は共に『世本』作篇の音楽に関連する記録を整理し、考古学の発見などと対照しながら、音楽史の立場から楽器の発明について、議論を展開した。『世本』作篇は聖人が器物を作り、すなわちこの世界の出来上りを語るものである。作篇の内容は作成された当時の世界観を反映するものであり、史実として音楽史に位置付けることは不可能である。

(3) 李弘喆二〇一八参照。

(4) 藤田勝久一九九五参照。

(5) 吉本道雅二〇〇七参照。

(6) n-gramとは「n個の単位(gram)の組み合わせ」を意味する。(nは任意の数を、単位にはこの種の研究では文字や単語を当てる)。

(7) 山田崇仁二〇〇一参照。山田の研究は本格的に佚文形態を検討する起点であり、『世本』の研究史においては、非常に重要な意味を持つ。

(8) 李弘喆二〇一八においては、先に前漢末期の学術史的時代背景において、『世本』がいかなる状況の中で世に現れたかを検討した上で、漢代における『世本』に対する認識・受容のありかたの推移を、学術史の全般的動向に位置附けた。そして、李弘喆二〇一九においては、『世本』輯本にみえる宋忠の注釈と考えられる記述を整理した上で、宋忠の学問の特徴に基づき、『世本』の文献的性格を再考し、『世本』宋忠注成立の学術史における意義を提示した。さらに、李弘喆二〇二〇においては、『三礼』における『世本』の受容実態を明らかにした。

(9) テキストの分析作業においては、原文の表現をそのまま提示する必要がある。そのため本稿では訓読は行わない。

(10) 李弘喆二〇一九参照。

(11) 三礼は即ち『礼記』・『周礼』・『儀礼』である。なお、各正義のテキストについては、阮元の『十三経注疏』に従う。

(12) 三伝は即ち『左伝』・『公羊伝』・『穀梁伝』である。

(13) 以下『釈文』と略す。

(14) 野間文史一九九八、喬秀岩二〇〇一参照。

(15) 李弘喆二〇一九参照。

(16) 『太玄経』范望注本卷首参照。

(17) 近代爲義疏者、有全緩・何胤・舒瑗・劉軌思・劉醜・劉焯・劉炫等。然焯・炫並聰穎特達、文而又儒、擢秀幹於一時、騁絕譽於千里。固諸儒之所揖讓、日下之無雙、於其所作疏內特爲殊絕。今奉勅刪定、故據以爲本。

(18) 近至隋初、始流河朔。其爲正義者、蔡大寶・巢翁・費彪・顧彪・劉焯・劉炫等。其諸公旨趣、多或因循估釋注文、義皆淺略。惟劉焯・劉炫最爲詳雅。……雖爲文筆之善、乃非開獎之路。義既無義、文又非文。欲使後生、若爲領袖、此乃炫之所失、未爲得也。今奉明勅、考定是非、謹罄庸愚、竭所聞見、覽古人之傳記、質近代之異同。存其是而去其非、削其煩而增其簡、此亦非敢臆說、必據舊聞。

(19) 晉宋傳授、以至于今、其爲義疏者、則有沈文何・蘇寛・劉炫。然沈氏於義例粗可、於經傳極疏。蘇氏則全不體本文、唯旁攻賈服。使後之學者鑽仰無成。劉炫於數君之內、實爲翹楚。……又意在矜伐、性好非毀、規杜氏之失、凡一百五十餘條。習杜義而攻杜氏、猶蠹生於木而還食其木、非其理也。雖規杜過、義又淺近。所謂捕鳴蟬於前、不知黃雀在其後。……然比諸義疏、猶有可觀。今奉勅刪定、據以爲本。

(20) 劉炫字光伯、河間景城人也。少以聰敏見稱、與信都劉

焯閉戶讀書、十年不出。炫眸子精明、視日不眩、強記默識、莫與爲儔。左畫方、右畫圓、口誦、目數、耳聽、五事同舉、無有遺失。……開皇二十年、廢國子四門及州縣學、唯置太

學博士二人、學生七十二人。……炫性躁競、頗俳諧、多自

矜伐、好輕侮當世、爲執政所醜、由是官塗不遂。著論語述

議十卷、春秋攻昧十卷、五經正名十二卷、孝經述議五卷、

春秋述議四十卷、尚書述議二十卷、毛詩述議四十卷、注詩

序一卷、算術一卷、並行於世。

(21) 古勝隆一一〇〇一參照。

(22) 喬秀岩二〇〇一第三章參照。

(23) 襄二十九年「劉炫云、據世本、高止敬仲玄孫之子。不

立止近親遠取敬仲曾孫者、齊人賢敬仲故繫之」。

(24) 野間文史一九九八參照。

(25) 説明の便宜上その分類に従っているが、『世本』原書の

章立てがこのように分類されていたことを保証するもの

はない。

(26) 以下『家語』と略す。『孔子家語』は版本による文字の

異同が多く、本稿は四部叢刊本(明刊本)に従う。

(27) 大戴禮帝繫篇、帝嚳卜其四妃之子皆有天下。上妃、有
郇氏之女、曰姜嫄、而生后稷。次妃、有娥氏之女、曰簡狄、

而生契。次妃、陳鋒氏之女、曰慶都、生帝堯。下妃、姬
氏之女。曰常儀、生摯。以堯與契俱爲嚳子。家語・世本其
文亦然。

(28) 以下周本紀と略す。

(29) 『漢書』司馬遷伝「故司馬遷據左氏、國語、采世本、戰

國策、述楚漢春秋、接其後事、訖于(大)(天)漢」。

(30) 『家語』には本姓解があり、「宋公生丁公申、申公生緡
公共及襄公熙。熙生弗父何及厲公方祀。方祀以下、世爲宋
卿。弗父何生宋父周。周生世子勝。勝生正考甫。考甫生孔

父嘉。五世親盡、別爲公族。故後以孔爲氏焉。一曰孔父者、

生時所賜號也、是以子孫遂以氏族。孔父生子木金父。金父

生瞿夷。瞿夷生防叔、避華氏之禍而奔魯。防叔生伯夏。夏

生叔梁紇」とする。本姓解は弗父何・厲公の父である「熙」

を「襄公」とし、すなわち『史記』宋世家の「煬公熙」と

している。一方で『左伝正義』昭公七年に引用される『家

語』本姓篇は「宋湓公熙」と、「熙」はそのままで「襄公」

を「湓公」に改めている。

(31) 『家語』孔子世系の「襄公熙」を「湓公熙」に書き換え
たと考えられる。

(32) 閔公子弗父何生宋父、宋父生世子、世子生正考父、正
考父生孔父嘉、孔父嘉生子木金父。木金父降爲士、故曰滅

於宋。金父生祁父、祁父生防叔。防叔爲華氏所偁、出奔魯、爲防大夫、故曰防叔。防叔生伯夏、伯夏生叔梁紇。

(33) 『潜夫論』志氏姓と『世本』との關係の詳細については、別稿で検討する。

(34) 即ち『大戴礼記』帝繫を指すと考えられるが、疏文の書き方では帝繫が単行していた、あるいは帝繫を単行本として扱っていたようである。

(35) 案今世本・帝繫及大戴禮五帝德并家語宰我問・太史公五帝本紀、皆以黃帝爲五帝。此乃史籍明文、而孔君不從之者。孟軻曰、信書不如其無書。吾於武成取二三策而已。言書以漸染之濫也。孟軻已然、況後之說者乎。又帝繫・本紀・家語・五帝德皆云、少昊即黃帝子、青陽是也。顓頊、黃帝孫、昌意子。帝嚳高辛氏爲黃帝曾孫、玄囀孫、僑極子。堯爲帝嚳子、舜爲顓頊七世孫。此等之書說五帝而以黃帝爲首者、原由世本。經於暴秦、爲儒者所亂。家語、則王肅多私定。大戴禮・本紀出於世本、以此而同。蓋以少昊而下皆出黃帝、故不得不先說黃帝、因此謬爲五帝耳。

(36) 『釈文』湯誓には「王侯世本、湯名天乙」がみえる。

(37) 『大戴礼記』について、本稿は四部叢刊本（明刊本）に従う。

(38) 渡邊英幸二〇一五参照。

(39) 實際に『礼記正義』には『世本』の世系関連の引用例が頻見し、そのほとんどは「A生B」のかたちである。それについては、李弘詰二〇二〇参照。

(40) 以下殷本紀と略す。

(41) 殷契、母曰簡狄、有娥氏之女、爲帝嚳次妃。三人行浴、見玄鳥墮其卵、簡狄取吞之、因孕生契。

(42) 殷本紀は「祖乙崩、子帝祖辛立。帝祖辛崩、弟沃甲立、是爲帝沃甲。帝沃甲崩、立沃甲兄祖辛之子祖丁、是爲帝祖丁。帝祖丁崩、立弟沃甲之子南庚、是爲帝南庚。帝南庚崩、立帝祖丁之子陽甲、是爲帝陽甲。帝陽甲之時、殷衰。自中丁以來、廢適而更立諸弟子、弟子或爭相代立、比九世亂、於是諸侯莫朝。帝陽甲崩、弟盤庚立、是爲帝盤庚」となる。

(43) 帝中丁崩、弟外壬立、是爲帝外壬。仲丁書闕不具。帝外壬崩、弟河亶甲立、是爲帝河亶甲。河亶甲時、殷復衰。河亶甲崩、子帝祖乙立。

(44) 帝盤庚崩、弟小辛立、是爲帝小辛。帝小辛立、殷復衰。百姓思盤庚、迺作盤庚三篇。帝小辛崩、弟小乙立、是爲帝小乙。帝小乙崩、子帝武丁立。

(45) 『礼記正義』喪服小記や祭統等参照。

(46) 吉本道雅二〇〇七参照。

(47) 後漢時代における『世本』の受容実態については、李

弘喆二〇一八参照。

(48) その詳細については、野間文史一九八八参照。

(49) 李弘喆二〇一九参照。

(50) 司馬遷の『世本』参照については、『漢書』司馬遷伝参照。なお、『世本』と『漢書』との関係については、李弘喆二〇一八参照。

(51) 『礼記正義』における『世本』の受容実態については、

李弘喆二〇二〇参照。

* 本稿は杉山財団特別研究助成金の助成を受けたものである。

(京都大学文学研究科非常勤講師・大手前大学史学研究科共同研究者)

THE TOYO GAKUHO

THE JOURNAL OF THE RESEARCH DEPARTMENT OF
TOYO BUNKO

Vol. 103, No. 1

June 2021

Difficulties in Interpreting the *Book of Origins*: Analysis of
Shiben Citations in the *Zhengyi* Commentaries on the three Chinese Classics

LI Hongzhe

This article analyzes the role of the *Book of Origins* (*Shiben* 世本), a lost work, in the three of the commentary collection *Correct Meaning of the Five Classics* (*Wujing Zhengyi* 五經正義), that is to say, the *Zhengyi* commentaries on the *Book of Changes* (*Zhouyi* 周易), the *Book of Songs* (*Maoshi* 毛詩) and the *Book of History* (*Shangshu* 尚書), keeping in mind the influence of commentaries predating the *Wujing Zhengyi* and focusing on the diverse receptions of *Shiben* over time.

Beginning with the *Zhouyi Zhengyi*, the author notes the absence of any *Shiben* citations there, due to the fact that the compilers of the 7th century *Wujing Zhengyi* emphasized the correspondence between the existing commentaries (*zhuwen* 注文) they adopted and the sub-commentaries (*shuwen* 疏文) they also adopted or wrote anew themselves. The *Zhouyi Zhengyi* accepted Wang Bi's 王弼 commentary of the 3rd century which did not quote any of the *Shiben* text.

Next, the author notices that since the *Shiben* citations in the *Maoshi* and *Shangshu Zhengyi* are limited to the content of the canon (*jing* 經) rele-

vant to those works, they concentrate chronologically on the Three Dynasties Period (*Sandai* 三代) and before, and in the latter, *Shiben* information on Antiquity (*Shanggu* 上古) is treated as one particular hypothesis that should be refuted. In both, *Shiben* genealogical information about the Yin and Zhou Dynasties is used together with citations from the *Shiji* 史記, but is often prioritized. That is because, the author points out, it had become the general consensus at the time of the *Wujing Zhengyi* compilation that Sima Qian 司馬遷 did consult the *Shiben* during the compilation of the *Shiji*.

The author additionally notes that from an analysis of the fragmented evidence, the cited *Shiben* genealogical narrative lacks regularity in form, and the so-called “unique” descriptive style of the citations is in fact no different from the general narrative style of the sub-commentaries in the *Wujing Zhengyi*.

The views offered in this article will hopefully contribute not only to the further study of *Shiben* itself, but also to the research regarding the restoration and reconstruction of lost and fragmentary texts in general. Since the historiographical research to date has long been focused on the task of restoring lost fragments of texts, perceptions towards restoration have remained at the level of Qing Dynasty textual criticism (Qingchao Kaozhengxue 清朝考證學). What scholars should be collecting in the restoration process is not fragments of the original, but rather a “consciousness” regarding the original, for it is impossible to “restore” the original text. What is possible, however, is to clarify the perceptions towards and the substance of the fragments by returning to where they have been cited. This article is an attempt to answer the fundamental historiographical question of what sources the restored text was based on and to present that how inseparable the historiographic research on restored texts is from investigating in what way the original work was received and adopted over time.